

「赦しなさい。そうすれば、自分も赦される。与えなさい。そうすれば、自分にも与えられる。」（ルカ6：37～38a）

「きょうだいの目にあるおが屑は見えるのに、なぜ、自分の目にある梁に気付かないのか。自分の目にある梁は見ないで、きょうだいに向かって、『きょうだいよ、あなたの目にあるおが屑を取らせてください』と、どうして言えようか。偽善者よ、まず、自分の目から梁を取り除け。そうすれば、はっきり見えるようになって、きょうだいの目にあるおが屑を取り除くことができる。」（ルカ6：41～42）

主イエスは人を裁くな、罪に定めるな、そうすれば、自分も裁かれず、罪に定められないと言われる。他人の欠点や落ち度に目をつけ、批判や悪口を言いたくなかった時は、精神状態が良くない時である。満たされない思いが相手に対し攻撃的にさせる。また、相手より上位に立ちたいという思いが、相手を裁き、罪に定めるのである。自分は裁かれる相手ほど愚かではないと、優位な立場を確保し、誇りたいからである。人を裁き、罪に定めたい思いに駆られる時は、深く自省すべきである。ただ、真剣に裁き、断罪する時もある。それは、命や人権を踏みにじる言動があった時には、断じて、承服しないことを表明することが必要である。主イエスはまた、赦しなさい、与えなさい、そうすれば、自分も赦され、与えられると言われる。人を赦し、与えたいと思う時は、精神的に安定している。赦し、与えることによって、人との関りを深めたいと思っているからで、その心は愛に満たされている。人と否定的に関わるのではなく、肯定的に関わる時、豊かで幸いな関係が生まれてくる。赦し、与えるならば、相手は升に詰め込み、揺すり、溢れるほどよく量って、懐に入れてくれる。自分の量る秤で相手からも量り返されるからである。

主イエスは続いて、三つの譬えを語られた。一つは、「盲人に盲人の手引きができようか。二人とも穴に落ち込みはしないか」である。この譬えは不適切ではないか。盲人に盲人の手引きはできる。私は、その光景を幾つも見て来た。また、障害をマイナスのイメージで譬えることは、良くない譬えであると思うからである。二つ目は、「弟子は師を超えるものではない。しかし、十分に訓練すれば、その師のようになれる」である。この譬えにも異議がある。訓練すれば、師のようになれると言っているが、師を超えた弟子は沢山いる。主イエスと弟子たちの関係においては、師イエスを超えることはできなかったが、一般的には、師を超えていった弟子たちが大勢いて、文化、文明を押し上げてきたことは事実である。三つ目は、下記の譬えである。「きょうだいの目にあるおが屑は見えるのに、なぜ、自分の目にある梁に気付かないのか。自分の目にある梁は見ないで、きょうだいに向かって、『きょうだいよ、あなたの目にあるおが屑を取らせてください』と、どうして言えようか。偽善者よ、まず、自分の目から梁を取り除け。そうすれば、はっきり見えるようになって、兄弟の目にあるおが屑を取り除くことができる。」人の目にあるおが屑に気付いて「取らせてください」と言う。ところが、自分の目には「梁」があるのに気付いていない。梁が目に入る訳はないが、大げさな譬えである。人の欠点には敏感であるが、自分の落ち度には鈍感である。これは、律法を押し付け、守っていないと責め立て、自らは守らないファリサイ派の人々の偽善を批判した言葉である。主イエスは、自分の目にある梁を取り除いた時、兄弟の姿がはっきり見え、忠告できるようになると諭している。